ともにつくる１　教育課程１

視点	3	ステップ	2	実施時期・回数	年間３回

幼小交流活動における合同指導計画作成の活用

【取組の実際】

(1)　本園４歳児学年と附属小学校３年生との交流活動は１０年以上前から相互のカリキュラムに位置づいている。年３回の活動は，互恵性・各回の関連性・経験の積み重ね等を重視している。近年は全３回の基本的な流れ及び内容等を継続し，幼小教員が合同で指導計画を作成している。

(2)　交流活動全３回の基本的な流れ及び内容等

①　４歳児と３年生がある程度子どもたち同士で関われるようになる時期として，１０月運動会後を初回として，２月くらいまでの間に計３回実施

②　初回は，幼児の緊張感を和らげるため，児童にはより幼児への意識を高められるように，活動場所は幼稚園とする。２，３回目は，幼児の期待感が高まるように，児童には自ら進んで行動することを促せるように，活動場所を小学校とする。

③　１回目の主な活動は『縄』を使う。毎年４歳児が１０月の運動会でプレゼントとしてもらう『縄』を使った活動を３年生が考え，それをペアの幼児に教えたり一緒に遊んだりする。

④　２，３回目の主な活動は，幼小ペアでできる製作や３年生が企画する内容としている。活動場所を小学校にすることで，児童が準備を進めやすく自信をもって幼児と関われている。また，幼児には目新しい場所に期待が高まったり親しみをもった児童とより関わりを深めて一緒に活動することにつながる。

(3)　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の活用について」~幼小教員による合同指導計画作成~

①　幼児・児童の情報共有

幼小が１対１又は２のペアを基本として活動している。相手が定まることで親しみがもちやすく，回を重ねるごとに相手に応じた関わりができるよう，情報共有を行う。

②　教材研究

基本的に，１，２回目の活動内容は幼稚園教員が考えた活動を行うことが多い。３年生が４歳児に適した活動を考える難しさと，小学校教員が３年生の考えた活動を４歳児に適した内容へと指導することの難しさがある。この１，２回目の打ち合わせや活動を踏まえ，３回目は，小学校教員の指導のもと，３年生の企画・運営で活動が行われる。

③　幼小教員による合同指導計画の作成　※自園の幼小接続トピック資料

上記 (3) ①幼児・児童の情報共有と (3) ②教材研究　を踏まえ，具体的な活動の流れを中心とした指導計画を同一紙面に作成する。幼小それぞれの教員がイメージすることに，少なからずずれが生じる。それを，同一紙面の指導計画を作成することで，互いの考えていることや注目していることなどに教員同士が気付くことが可能になる。あわせて，(3) ①②③それぞれにおいて「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についても具体的な姿から共有を図る。

【成果と今後の展望】

(1)　成果

①　幼小教員による合同指導計画作成により，互いのずれや，言葉の使い方等に気付きやすく，共有の手掛かりにすることが可能となる。文字に書き表すことで「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についても，４歳児学年での具体的な姿をもとに共有する手掛かりとなっている。

②　①で共有したことを交流活動の中で生かすと同時に次年度へと継続することができた。

(2)　今後の展望

他の活動や教科等でも幼小教員で共通理解を図る機会を設け，教育課程の見直しに反映を図る。

（14. 東京学芸大学附属幼稚園）

教育課程２

視点	1	ステップ	3～4	実施時期・回数	通年

幼小接続カリキュラムの作成と実践

【取組の実際】

(1) 幼小接続カリキュラム作成に向けて

幼小接続カリキュラムを作成するにあたり，その目的や意義を全職員でしっかりと共有した上で，組織的に取り組んでいく必要があると考え，次のように進めた。

(2) カリキュラム作成の実際

①カリキュラム作成の意義や目的の共有

幼小接続の意義や目的を，『幼稚園教育要領』『小学校学習指導要領』『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム』等の資料を参考に，幼小中の研究の推進役を担う研究開発部で共有し，三校園の全職員が一緒に集まる全体研修の場でその理解を得た。

②幼小接続カリキュラム検討部会の構築と研究への位置付け

組織的にカリキュラムの作成と実践を進めるために，「幼小接続カリキュラム検討部会」を作り研究組織に位置付けた。

③校園で目指す子供の姿を踏まえた，幼小接続期で目指す子供の姿の検討・共有

幼小接続カリキュラム検討部会で，校園で目指す子供の姿から，接続で目指す姿を「安心して学校生活を送り，伸び伸びと自己表現し，主体的に学びに向かっていく子供」とし，幼小接続の全体計画に位置付けた。【資料１】

④幼児期の発達や学びの姿の共有（幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりに）

小学校の各教科・領域の学びにつながる幼児期の発達や学びを部会で検討・共有した。

⑤幼児期の学びを踏まえた各教科・領域における指導の構えの検討・共有

幼児期に発達や学びを踏まえ，小学校の各教科・領域において，どんな構えで指導すればよいのか検討し「幼小接続カリキュラム（概要）」を作成した。【資料２】

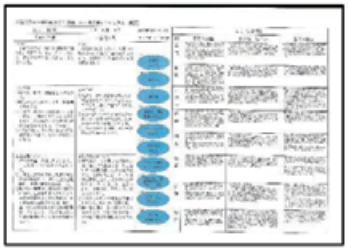
⑥アプローチカリキュラムと小学校スタートカリキュラム期間の学習指導内容の検討

これまでの検討を踏まえ，アプローチカリキュラム【資料３】とスタートカリキュラムの具体を作成した。特に，スタートカリキュラムでは，「子供の主体的な学びにする」「幼児期の学びを踏まえる」という視点から，各教科等の最初の単元の指導計画を作成した。【資料４】

(3) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について

スタートカリキュラムの作成にあたり，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに幼児期の発達や学びを共有した。

【資料１】


【資料２】

【資料３】

【資料４】

【成果と今後の展望】

(1) 成果

暫定版ではあるが，幼稚園・小学校教員が接続の必要性を強く感じ，幼小カリキュラムを作成し，実践を行うことができた。

(2) 今後の展望

幼小接続カリキュラムに基づく実践を振り返り，評価・改善へとつなげていき，よりよいカリキュラムへ見直しを図っていく。

（17. 新潟大学教育学部附属幼稚園）

教育課程３

視点	3	ステップ	3～4	実施時期・回数	１０月～１２月 2回

幼小連携交換保育（授業）

【取組の実際】

(1)　富山大学人間発達科学部附属幼稚園は，隣接する附属小学校と授業や行事を通して交流を図ってきた。平成２９・３０年度の２年間，子供の学びに着目した教育課程の再編をきっかけとして，幼稚園教育要領及び小学校学習指導要領の改訂を意識し，接続期のカリキュラムを作成することとした。カリキュラムの作成のためには，　幼児・児童理解が必須である。そこで，夏休みまでに幼小接続推進会議を４回設け，年長児担任（２名）と１年生担任（２名）が「修了までに育ってほしい姿」から，小学校教員が考える入学までに必要とする能力と，現在，幼稚園教員が育てている子供たちの能力に相違はないかを確認することで，実際に活用できる接続期カリキュラムを作成するための見通しをもつことができた。

(2)　幼小接続推進会議を行う中で，幼稚園と小学校の幼児・児童理解やお互いの教育課程についてより理解を深めなければならないという課題が出てきた。そこで，小学校教員が幼稚園で保育を，幼稚園教員が小学校で授業を実践することで，相互理解を深めていくこととなった。以下は，その詳細である。

①　小学校教員の幼稚園の保育体験

１年生担任が，幼稚園に来園し，年長児担任とティームティーチングを組んで運動的な遊び「宝取り鬼をして遊ぼう」の保育を行った。指導案のねらいや活動の内容を事前研修会で吟味することや，事後研修会で子供の育ちや学びについて語り合うことで，年長児や保育への理解を深めることができた。

②　幼稚園教員の小学校第１学年の授業体験

幼稚園教員が第１学年算数科「どちらがひろい」の学習を小学校教員と共に行った。幼児教育と小学校教育との違いや１時間のねらいを達成するための子供の見取りやまとめ方，言葉のかけ方について学び，児童や学習への理解が深まった。

(3)　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について

①　幼小接続推進会議の中で，年長児担任が今後目指す姿として，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を提示し，現在の育ちと３年間を通した幼児の成長について理解を求めた。

②　小学校教員の保育体験の中で，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を話題に挙げ，具体的な姿から理解を求めた。

③　接続期カリキュラムの中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識して作成した。

【成果と今後の展望】

(1)　成果

・　幼稚園の子供たちは小学校の教師や生活に安心感をもち，進学への期待感を高めることができた。

・　教師は保育や授業を通して，互いの校種の子供の育ちに気付き，理解しようとする姿勢が生まれた。指導案の検討に年少組・年中組担任も関わることで，新しい気付きやカリキュラム編成に必要な内容検討にもつなげていくことができた。早期に手立てをする必要のある内容の共通理解ができた。

・　年長組と１年生担任だけでなく，他の学年や教科の教師の参加が少しずつだが増えていき，幼小接続についての意識を高めることができた。

(2)　今後の展望

これからさらに幼小連携に関わるカリキュラムの実践・評価から改善を進めていく。今後も幼小の連携活動が持続していくように，互いに努力していく必要がある。互いの理解を深めていくための試みを，いろいろな教師が様々な視点から進め，内容を深めていくことが大切である。より多くの教師が興味をもってともに協議していくことが，より質の高い連携につながると考える。これまでの成果と課題をいろいろな方面に発信していきたい。

（18. 富山大学人間発達科学部附属幼稚園）

教育課程４

視点	3	ステップ	2～3	実施時期・回数	年間・４回

遊びの具体的な姿を小学校と共有するために

【取組の実際】

(1) 鳥取大学附属学校園では，共通する研究テーマ『「いま伸びする力』と『あと伸びする力』を育てる」を設定し，「幼・小・中一貫型教育」を実現すべく取り組んでいる。今の充実が将来の子供の伸びを保障すると考え，「あと伸び」する芽を育むための「いま伸び」はどうあるべきか考えて日々の保育の充実を図ろうと実践しているところである。そのために，本園の教育課程に基づいた取組が小学校でどのように発展し，子供の学びがつながっているかを検証する必要があると考えた。そこで，子供の遊びの姿や教師の意図などを小学校教師と共有するために本園で作成した記録を小学校に引き継いで具体的な取組を伝えると共に，その取組を踏まえて小学校１年生の生活科の単元を構成しているか検証している。

(2)　下記は，その一例である。

①　年度末に前年度の幼稚園での遊びのすべての記録（例：図１）を，小学校に引き継ぐ。また，年４回のなかよし交流（５歳児・小学校１年生対象）の前には，それぞれがどのような学習・遊びをしているか，口頭，記録，ビデオなどを使って伝える。

②　①を受けて小学校の１年生担任は生活科の単元構成を検討し実践する。（授業の様子１・２）

③　なかよし交流や公開研究会などの機会，その前後を利用して附属学校部・幼小連携部会などで参観し，授業について意見交換，考察を行う。

(3)　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について正しく理解するための研修会を行う。

①　附属学校部・幼小連携部会（この内容については年１回：参加は附属幼稚園３名，附属小学校３名，附属特別支援学校４名程度）を利用して，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める研修を行った。

②　上記の部会以外にも，授業や保育を見合った後に幼小連携部会で集まって振り返りの研修会をもち，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点にして話し合った。

特に①の会では，小学校に引き継いでいる記録に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を記載しているため，取扱いや内容について理解した上で記録を見てほしいと考えた。記録の中にある幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は，どのような意味で記載しているかも伝えている。

【成果と今後の展望】

(1)　成果

取組の実際(2)①で挙げている遊びの記録は，本園でのすべての遊びを網羅しているわけではないが，小学校の教諭は，幼稚園でどのような経験をして就学しているかということを大まかにつかむことができ，それぞれの授業に反映させやすかったとのことであった。そして，その内容を踏まえた単元構成を意識し，それらを参観し考察することで接続に関して一緒に取り組むための土台づくりができた。本園での遊びの具体的な姿を小学校に伝えていくことの重要性を認識した。

(2)　今後の展望

本園の記録を踏まえて単元構成を検討しているものは，小学校１年生の生活科のみの取組であるので，その他の教科についても広げていきたいと考えている。

（33. 鳥取大学附属幼稚園）

教育課程５

視点	2	ステップ	3	実施時期・回数	年間・９回

未来創造科ＷＧ

【取組の実際】

(1)　島根大学教育学部附属学園では，義務教育学校移行に伴い，グローカル人材（世界的な視野で物事を考え，自分の住む地域を世界に誇れる町にするために行動できる人材）の育成を目指し，新教科「未来創造科」を設置した。これまで附属小学校，附属中学校で行っていた「総合的な学習の時間（小学校：いきいき含む）」「生活科」の学習を基本的に踏襲しながら，各学年の縦のつながりも考慮し，より魅力的な活動・学習になるようＷＧを立ち上げ，定期的に話し合いをしている。ＷＧは，校園長，副校園長，各校研究部長，総合担当，幼稚園主任，大学教員（３名）で構成されている。様々な校種の参加者それぞれが意見を出し合うことで，異校種の壁が少しずつ取り除かれ，ひとつの学園の教員であるという意識改革にもつながっている。

(2)　下記は，その一例である。

図１

① 未来創造科の方向性，目標，育てたい資質・能力，学習テーマ・内容及び授業時数について，他教科との関連等，検討すべきことを参加者全体で確認した。（図１）

② ①を受けて，まず未来創造科で育む資質・能力について検討した。これまで少しずつフィールドを広げながら地域に根ざした取組を積極的に行ってきたが，今後はこれまでの成果を踏まえて，未来創造科で育む資質・能力を明確にし，更に魅力的な学習・取組になるよう参加者それぞれが考える資質・能力について意見を出し合い，大きく３つに分類を行った。（図２）そして，今後公立学校のモデルになるよう，その大きく分類したものを「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」の視点から整理することにした。

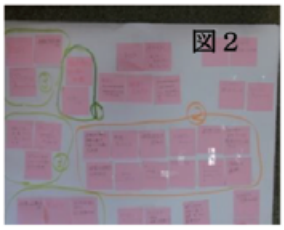


図２

③ ①②を受けて，幼稚園でも未来創造科の目標や内容，方向性を考慮し，保育の内容，保育の中で今後大切にしたいことなどを検討した。

(3)　「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」の活用について

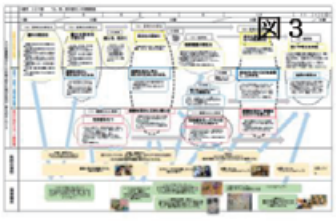


図３

① 子供の遊びの「学びの芽生え」は，瞬間的なものではなく，「遊びのプロセス」の中にあると捉え，子供の経験がどうつながり，変容していくのかを，丁寧に記録から見取るようにしている。「遊びの活動経過シート」（図3）を使い，「３つの資質・能力」，また「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」を視点に分析し，「個々の遊び」に内包する，発達の期に沿った学びの要素を明確化した。このような活動経過を積み上げていき，可視化することで，幼小接続教育の構造を理解しながら異校種の教員とも話し合うことができるようになった。

② 年長５歳児と小学校１年生の交流活動も，「遊びの活動経過シート」を参考にしながら，共同で指導案を作成している。

【成果と今後の展望】

(1)　成果

視点を明確にし，共有化することで，個々の教師の経験や主観で見取った学びではなく，分析的に読み取った子供の遊びが内包する学びとして，幼稚園教員はもちろん，異校種の教員とも共有することができた。

(2)　今後の展望

未来創造科に円滑なつなぎができるよう，遊びを丁寧に見取るということを基本姿勢とし，ＰＤＣＡサイクルを繰り返し続けていきながら，未来創造科で育まれる資質・能力との連続性を踏まえ，円滑なつなぎができるよう，義務教育学校教員と共に教育課程の見直しを図っていく。

（34. 島根大学教育学部附属幼稚園）

教育課程６

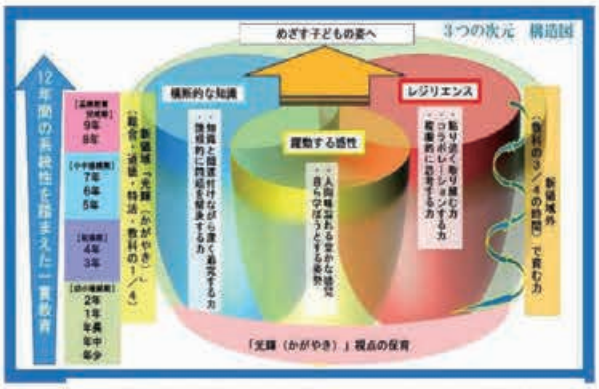
視点	1	ステップ	3	実施時期・回数	年間２０回

幼小接続期カリキュラムの開発

【取組の実際】

(1)　育てたい資質・能力の明確化

本園は，附属三原小学校・中学校と合同で，これからの時代に求められる３つの次元（躍動する感性・レジリエンス・横断的な知識）の基礎となる資質・能力を育成するカリキュラムの研究開発を行っている。その中で，共通に育みたい資質・能力を，子供たちの実態に即しながら，「人間味溢れる豊かな感覚」「粘り強く取り組む力」など７つ設定した。



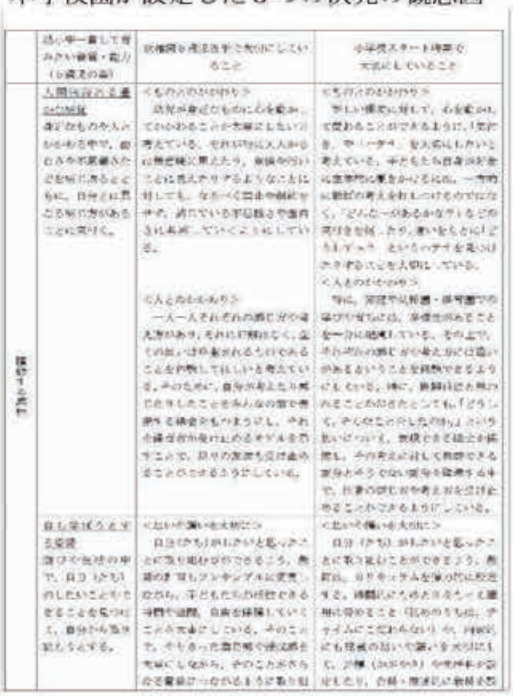
本学校園が設定した３つの次元の概念図

(2)　園児，児童の実態把握

幼稚園及び小学校低学年の教師が幼小接続期部会を組織し，日常的に保育・授業を観察し意見交換を行っている。また，年長児と小学校１年生の交流の単元「仲良し大作戦」を全４６時間で計画し，交流を行うごとに，お互いの子供たちの様子や次回に向けての話し合いを行っている。

(3)　設定した各資質・能力に関して，「幼稚園５歳児後半及び小学校スタート時期で大切にしていること」の共通確認

設定した７つの資質・能力に対して，幼稚園５歳児後半に大切にしていることを小学校に伝えると共に，そのことを受けて小学校スタート時期に大切にしていることを，話し合いながらまとめた。幼稚園の記述には，幼児期の終わりまでに育ってほしい姿も考慮に入れ，それらの姿を小学校に伝えるようにした。



幼稚園５歳児後半及び小学校スタート時期で大切にしていること

(4)　幼小接続期カリキュラムの開発

(3)の内容を大事にしながら，資質・能力を連続して育成していくための，幼小接続期のカリキュラムを作成中である。

【成果と今後の展望】

(1)　成果

幼小中の教師が，共通の資質・能力を連続して育成していこうとする認識をもつことができた。そして，そのことに向かってカリキュラムを作成していこうとする方向性をはっきりすることができた。

(2)　今後の展望

具体的な接続期のカリキュラムを今後作成していく。また，特に幼児期の評価の方法について検討していく。

（37. 広島大学附属三原幼稚園）

教育課程７

視点	2	ステップ	2～3	実施時期・回数	年間・５回

教育課程に位置付けた計画的交流と必要感から創り出す交流

【取組の実際】

(1)　山口大学教育学部附属幼稚園と附属山口小学校では，幼小のなめらかな接続を意識し，教育課程に交流を位置づけて行っている。交流を通じて，接続期の子供たちの育ちを培う体験をもつと共に，幼小の教員が共に保育・授業を計画・実践・振り返りを行うことで，接続期の子供たちへの発達に即した援助・支援を探る機会となっている。

　また，幼小中一貫教育に取り組んでいることから，交流の保育・授業を実施する際には共通の視点「対象と向き合う姿」「自己と向き合う姿」「他者と向き合う姿」から発達の連続性を踏まえた交流の計画・実践・振り返りを行い，１２年間の育ちや学びとのつながりも意識して行っている。

　年長と小学１，２年生との交流は，教育課程に位置づけている計画的な交流と子供や教師の思いなどの必要感から創り出す交流とがある。計画的な交流は，２学期の１年生の生活科の単元「身近な生き物を探そう」と３学期の２年生の生活科の単元「公共の場のマナーを学ぼう」で行っている。必要感から創り出す交流は，１学期は主に子供同士が親しむ機会として，２学期以降は，子供たちのニーズや授業等での必要感を教師が捉えて，特定の教科に限らずもつようにしている。

(2)　交流の流れ（昨年度の取組）

①　５月の幼小連絡会で、交流の年間計画をたて，見通しをもつ。
・昨年度の取組の成果と課題について共通理解を図る。
・幼小それぞれの子供の実態・課題について情報交換を行う。
・今年度の交流のもち方について話し合いを行う。

②　情報共有→計画→交流→振り返りを繰り返しながら実践する。（図1）

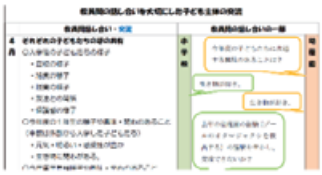


図１

（１学期の交流）
・１年生の体育「いろいろな種類のマットや平均台などを使った運動遊び」での交流。１年生が考えた様々な動きができるサーキットを年長児に披露し，一緒に楽しんだ後，年長児はそれをモデルに，園の遊びの中で自分達でサーキットをつくって楽しむ。（必要感から創り出す交流）
・１年生が幼稚園のプールにいるオタマジャクシを探しに来る。年長児は捕獲の経験のある１年生からコツを教わり，オタマジャクシを幼稚園の田んぼに救出する。（必要感から創り出す交流）

（２学期の交流）
・１年生の生活科「身近な生き物を探そう」での交流。年長児も一緒に沢へ生き物探しに行く。年長児は１年生から生き物の居そうな場所や取り方を教わり，一緒に生き物を探す。（計画的な交流）
・１年生が生活科「秋の自然物を使って遊ぼう」でつくったゲームコーナーに年長児が参加し，楽しむ。その後，年長児が遊びの中でやっていたお店屋に１年生を招く。（必要感から創り出す交流）

（３学期の交流）
・２年生の生活科「公共の場のマナーを学ぼう」で２年生から年長児がバスの乗り方や，車内・バス停での過ごし方，登下校時のマナーを教わる。授業後，給食や掃除，昼休みの遊びなどで一緒に過ごす。就学を前に小学校生活を体験し，１年生になることへの期待感をもつ。（計画的な交流）

【成果と今後の展望】

(1)　成果

①　頻繁に連絡を取り合うことで子供の思いや願いをもとにした自然な交流を１学期から行うことができ，そこでの体験を２学期以降の計画的な交流に生かすことができた。

②　１年生との交流で体験したことを年長児が遊びや生活に取り入れて楽しむ姿が見られた。

(2)　今後の展望

①　交流の成果を生かし，「アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム」を編成する。

（38. 山口大学教育学部附属幼稚園）

教育課程８

視点	2	ステップ	4	実施時期・回数	年間を通して約１０回

「科学的思考力や学びを接続し発展させる」取組

【取組の実際】

(1)　合同保育／授業

鳴門教育大学附属幼稚園と附属小学校では，平成１３年の文部科学省の研究開発学校指定から幼小連携のカリキュラム開発をはじめ，平成２３年からは科学的思考を軸とした幼小接続教育課程の開発を行った。「小学校生活への適応を促す接続」という意義を越えた，「科学的思考力や学びを接続し発展させる」という願いを込めての取組である。幼児・児童と保育者・教師がそれぞれの教育目標やねらいをもち，共に活動し，互いの持ち味や教育の深まりを感じつつ学び合う「合同保育／授業」は取組の中心的存在である。

(2)　接続期後期の教育課程と指導計画

次に紹介する接続期後期のカリキュラムは,幼児期のカリキュラムと同じ視点,つまり,予想される子供の姿（実態）,指導のねらい,指導内容,指導の要点と環境構成の留意点で構成されている。幼児教育の指導の視点を継承することで,子供の育ちの連続性を確保しながら,教科教育を中心とした小学校生活へと導きやすいと,１年生担任たちに好評を得ている。新生活への適応,生活態度や学習習慣,学習内容につながる知的好奇心や認知発達など,個々の個性や発達の状況についても把握しやすいとのことである。

接続期後期（第１学年）のカリキュラム　１年生４月の指導計画

Ⅰ期（４月）　わたしたち　一年生

児童の姿	ねらい	指導内容	環境の構成と援助の留意点

(3)　「生活学習」の実践

幼小接続の教育課程を創るためには，幼児期の発達や学びの特質を活かした接続期後期の学習，適応指導にとどまらない連続性のある学習を創ることが重要となる。それは，児童が夢中になって活動する過程に，この時期の教科内容を必然的に埋め込むことで可能となる。いわゆる幼児期の遊びの要素をふんだんに取り入れた児童期の学びの過程である。鳴門教育大学附属小学校の第１学年では教科の枠を外し，生活体験を重視した「生活学習」を実践している。

【成果と今後の展望】

(1)　成果

平成２７年度文部科学省委託「幼児教育の質向上に係る推進体制等の構築モデル調査研究」，「幼児の科学的思考を支える非認知的能力の発達的様相―好奇心・やり抜く力・協同的感性の視点から―」（鳴門教育大学附属幼稚園2016）でも，科学的思考力という認知的な能力は，事象から問題を見い出す好奇心や探究心が原動力となり，事象に働き掛け試行錯誤する力，試行錯誤を支えるポジティヴな考え方，集中力や根気強さなどのやり抜く力，人と関わり協同的な活動を展開するために必要な自己肯定感や人間関係調整力などの「育ちと学びを支える力」（非認知的能力）といわれる様々な能力と相互に関連し合って発達していることが検証できた。

(2)　今後の展望

教員の人事異動なども考慮してより簡潔で汎用性のあるプログラムの構築が必要である。

（39. 鳴門教育大学附属幼稚園）

ともにつくる2　見直し・改善1

視点	2	ステップ	3～4	実施時期・回数	年間・２４回

幼小中共同の保育・授業実践を語るカンファレンス

【取組の実際】

(1)　信州大学附属松本学校園では，以前より附属幼小は，交流活動を行ったりお互いの保育や授業を参観したりするなどして連携を行っていた。しかし，幼小接続の観点から考えると，子供の遊びの姿を参観はするだけにとどまることが多く，子供の育ちや指導援助の意味などが，小学校教員に理解してもらえないことがあった。そこで，本園で実施しているカンファレンスを活用し，教育内容の質の向上を図ると共に小学校教員に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や「資質・能力」などにも触れ，「たくましく心豊かな地球市民」を育むために，自己表現力・課題探求力・社会参画力を軸として，資質能力を実生活で有機的・総合的に活用する力を育成する，幼小中一貫教育としての教育課程/指導・評価の開発に生かせる活動として年間を通じて様々なカンファレンスを実施した。

(2)　下記は，その一例である。

①　幼稚園では，これまでの子供の「思いや願い，問い」を捉えながら，子供が遊びにうちこめるように，教師ができることは何かについて，実践事例※取組の実際からもう一度考えてみることにした。（写真１）

②　①を受けて，幼稚園と小学校の教員と合同で，保育や授業の実践記録を元に，子供の「思いや願い，問い」についてどう捉え，どのように援助や指導したらよいかについてカンファレンスを行った。（写真２）

③　①②を受けて，幼小中学校の教員と大学教員を交えた幼小中合同職員会において，保育実践記録や子供の長期的な視点で育ちを振り返る記録※取組の実際を基に幼小中合同のカンファレンスを行った。（写真３）

写真１

写真２

(3)　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について

①　カンファレンスの際には，幼小中を貫く資質・能力についてや「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についても語ることで，小学校の前倒しではなく，幼稚園の子供のよさを小中学校につなげるという意識を全員で共有し，指導援助の工夫を考えたり，教育課程の編成をしたりすることができた。

②　カンファレンスを通して共有された幼稚園で大切にしている子供の見方や育ち，環境構成や援助の工夫などを出発点として，小学校の教育課程や授業づくりに幼稚園も参画した。

【成果と今後の展望】

写真３

(1)　成果

①　小中学校教員とのカンファレンスにおいて，実践記録から一人一人の子供たちの「資質・能力」や子どもの思いを捉え，長期的な視野で子供の変容を捉えることにつながった。

②　①を幼小で共有したことから，小学校教員と共に教育課程の見直しをすると共に，保育や授業の指導や援助のつながりを考えることに生かすことができた。

(2)　今後の展望

①　さらに１２年間の教育課程の改善と評価の在り方を検討すること。

（21. 信州大学教育学部附属幼稚園）

見直し・改善２

視点	3	ステップ	4	実施時期・回数	年間・約２０回

幼小の指導計画を一つにする交流実践

【取組の実際】

(1) 「５・６歳部会」の目的

本校園では，平成１４年度以来，年長児（５歳児）と小学１年生（６歳児）の担任で構成される「５・６歳部会」を設定し，幼小の指導計画を一つにする交流実践に継続して取り組んでいる。その目的は，「学びの連続性を保障し，幼小接続期の子供にふさわしいカリキュラムを作ること」「幼小の教師が互いに学び合い成長すること」の２点である。

(2) 活動の種類

①合同単元：年２単元，新たに創り出す単元と改善を重ねる単元を計画し，５・６歳の教師が協同して創り出す機会を保障する。各４回で構成する。「あきをかんじてたのしもう」など。

②交流単元：年２単元，各１回で構成する。「かるたとり」「きょうしつをみせてもらおう」など。

③日常の交流：設定可能な日数で，幼稚園の園庭に６歳児がやってきて一緒に好きな遊びをする。

(3) 指導計画立案，検討と実践

５・６歳児の姿を基に，５４の資質・能力の観点で共通のねらいを幼児教育における方向目標の考え方を共有し，設定している。活動の内容やねらいに向けた手立ての検討では，５・６歳互いの具体的な子供理解や教育観を交流している。共に創り出した指導計画を基に実践し，傍で互いの関わりを見聞きし，気付きを交流することも，互いに刺激や揺さぶりを得ることに繋がっている。（取組の具体はトピック資料参照。）

(4) 子供の事実を基にした評価と指導計画のリデザイン

実践後，子供の学びを，事実と教師の解釈を分けて資質・能力毎に記録し，それを根拠に指導計画の見直し「リデザイン」をしている。子供の学びの記録一つ一つに番号を振り，それぞれの記録からねらいや環境の構成，教師の援助がデザイン通りでよいか，改善の必要があるか，そうであればどう改善するのかを検討する。子供の事実を基に検討することで，思い込みや先入観をできる限り排除した子供理解や，ボトムアップの改善を可能にしている。また，資質・能力毎に記録することで，実際の子供の姿を通して共通の資質・能力への捉えも深まり共有される。

(5) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について

本取組でも用いている幼小共通の資質・能力一つ一つの育ちの様相を，各年齢における幼児の姿で表した「目指す姿」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を明らかにしている。資質・能力の観点を用いて５・６歳児に共通のねらいを設定し，実践，評価することは，接続期の子供理解や指導方法，評価の在り方の検討，共有に繋がっている。

【成果と今後の展望】

(1) 成果

①子供への成果：５・６歳児共にその時期に相応しい多様な学びが得られた。５歳児は６歳児や小学校の教師，小学校の場に，６歳児は５歳児や幼稚園の教師，幼稚園の場に親しみを覚えた。

②教師への効果：資質・能力を育む手立てについて幼小互いの考え方を交流し，５・６歳の子供に合った環境の構成や教師の援助を見出した。

(2) 今後の展望

取組を継続し，深化・充実を図る。さらに，これまでの知見の蓄積を整理し，接続期の中でも特に改善の余地のある小学校低学年に相応しい指導方法について明らかにしたい。

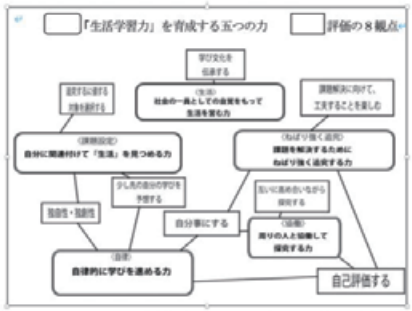
（30. 神戸大学附属幼稚園）

見直し・改善３

視点	2	ステップ	4	実施時期・回数	WGは年１２回

幼小教員が協働して教育実践における教員の意図を言語化する
—幼小一貫した評価の観点を立ち上げる—

【取組の実際】



（平成３０年度研究開発実施報告書（要約）より抜粋）

(1) 幼小合同で「評価WG」を設置

奈良女子大学附属幼稚園・小学校では，平成２７年度～３０年度の４年間，文部科学省研究開発学校の指定を受け，「幼小一貫教育において生活と学習をつなぎ，同年齢や異年齢で協働的に探究を深め，多様な能力や個性的な才能を引き出す『生活学習力』を育成する教育課程の研究開発」に取り組んだ。

研究を進めるにあたり，「生活学習力」を具体的にはどのような力とするのかについて，「カリキュラム WG」及び「評価 WG」において検討した。ここで報告する「評価 WG」は小学校教諭３名・幼稚園教諭３名・大学教員１名で構成され，研究開発２年次にあたる平成２８年度より立ち上げた。

(2) 幼小一貫した評価の観点の大枠を立ち上げるまで（詳細は別添トピック資料２参照）

①幼稚園での評価と小学校での評価の実際を確認する

幼小では，同じ用語を用いていても，その用語の含む概念や背景が異なることが多い。実際に教育実践を中心に語り合うことで互いの評価の実際について確認した。

②幼稚園文化と小学校文化の違いを自覚化する

各々の学校にはヒドゥンカリキュラムが存在する。そこで文脈の異なる他者が一方の文化に隠されているカリキュラムを読み解いていくことで，無自覚な評価の観点を自覚し言語化していった。

③幼小一貫して多様な能力や個性的な才能を評価する観点をデザインする

多様な能力の育成を目指していることが視覚的に伝わるように検討した。

④評価のキーワードを帰納的に抽出しカテゴリー化する

幼小全教員より，自由形式で評価の観点を言語化するアンケートを実施し，カテゴリー化した。

⑤言語化した評価と教育実践での感覚との「ずれ」を調整する

自身と他者の間にイメージの「ずれ」があることに気付き調整しようと他者と対話を重ねた。これにより「ずれ」の具体を意識化できるようになり，無自覚であった評価の観点が言語化されていった。

⑥評価のキーワードという部分を「生活学習力」という全体像から整理する

(3) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について

教育には，自らを取り巻く様々な文化や文脈が影響しており，自らの教育実践を振り返るにはその枠組みを自覚する必要があるという前提に立つことが重要である。本校園では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」などを参考にしながら，自身の教育観を実践から言葉にしていくことで幼小一貫した評価の観点を立ち上げていった。

【成果と今後の展望】

(1) 成果

幼児教育と小学校教育は成り立ちも文化も異なる。その二つの文化を接続するには，単に見える部分だけを繋ぎ合わせるだけでは教師も，何より子供にも負担が大きい。本校園では，同じ日本語を用いていてもイメージは文化や文脈によって異なることを前提とし，見える子供の姿や実践から見えない資質・能力を言語化し，互いの教育実践を尊重しながら幼小で一貫している資質・能力を見出していったことが，結果的に自らの教育実践をより理解しよりよいものにしていく手立てともなった。

(2) 今後の展望

①どの小学校教員にも資質・能力を共通言語として子供の育ちへの理解が深まるよう，発信する。

②附属小学校と共に教育課程のさらなる改善を目指す。

（32.奈良女子大学附属幼稚園）

見直し・改善４

視点	3	ステップ	３後半～４	実施時期・回数	年間・７回

幼小接続期カリキュラムの見直し

【取組の実際】

(1)　平成２６年度に，幼小中１２年間を見通した「考える力」の育ちを捉えた「一貫教育カリキュラム」を作成した。また，年長組担任と小学校１年生担任を中心に構成されている幼小接続部会で，１年生の追跡調査を行ったり，幼小接続期カリキュラムを研究主題の視点で見直したりして幼小教員で幼小接続期の子供の姿について共通理解を図ることを大切にしてきた。また，平成２９年度からは，園内で幼児の姿を教師全員で読み解き協議する場として「こどもカフェ」を行っている。

平成３０年度には，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で幼小接続期カリキュラムの「内容」と「環境構成及び教師の援助」を見直すこととした。その際に，まずは「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について幼小教員でも共通理解することが必要だと考え，幼小接続部会でも事例を用いて分析する「こどもカフェ」の機会をもった。その後，幼小接続期カリキュラムの小学校入学後における「内容」を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と各教科とのつながりの視点で考えながら見直した。

(2)　幼小接続部会において行った事例の分析の手順は，以下の通りである。

①　年長組担任から，小学校教員が想像しやすい場面の事例について写真を見せながら説明する。

②　事例に関する疑問や，より詳しく聞きたいことなどについて話し合う。

③　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で，事例から読み取った幼児の学びを，それぞれ付箋に書く。

④　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を一つずつ取り上げながら，ホワイトボードに付箋を貼っていき，共有する。

(3)　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について

①　幼小教員で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点として話し合うことで，様々な角度から遊びの中で得られる学びを読み取り，共通理解することができた。

②　事例を用いて「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共通理解した上で幼小接続期カリキュラムを見直すことで，幼児期の姿と各教科のつながりを考えることができた。

【成果と今後の展望】

(1)　成果

幼小教員で，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が共通理解されたことで，年長児後半の姿と小学校入学時の姿のつながりを同じ視点で考え，互いに理解を深めることができた。

(2)　今後の展望

幼小教員が互いの理解をさらに深めることができるように，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点をもとに，幼児の学びの姿を伝える方法を工夫すると共に，昨年度見直した幼小接続期カリキュラムを検証していく。一方，働き方改革に伴い，幼小接続部会の日程調整の難しさ，時間の縮小に伴う効果的な会の進め方などが課題となっている。

（35. 岡山大学教育学部附属幼稚園）

【連携から接続へのプロセスに見る考察】

「A幼小接続の取組の報告」の「連携から接続へのプロセス」について整理をし，それぞれの段階での大切なことや次のステップに推進するための留意点などを明らかにし，幼小の連携・接続を推進する上で参考にできるようにまとめた。

ステップ0
0園（0％）
連携の予定・計画がまだない

ステップ1
0園（0％）
連携・接続に着手したいが，まだ検討中である

ステップ1～2
1園（2％）
【キーワード】進学者数少　接続の困難さ
指導計画や保育・指導の実際を見合う機会
幼児・児童の姿を伝え合う機会

ステップ2
17園（35％）
年数回の授業，行事，研究会などの交流があるが，接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない
【キーワード】交流活動　相互参観　合同研修
スタートカリキュラムの構想
アプローチカリキュラムの構想
異校種の認識の違いへの気付き

ステップ2～3
14園（29％）
【キーワード】「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」
子供の姿の共通理解
互恵性のある交流　定期的・計画的交流　共同研究
接続期カリキュラムの編成・実施
幼稚園からの発信
継続した連携

ステップ3
6園（12％）
授業，行事，研究会などの交流が充実し，接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている
【キーワード】教員同士の交流の充実　子供の姿の共有
カンファレンスや記録の成果の共有
接続期カリキュラムの幼小合同の検討（PDCAサイクルの構築）
接続における汎用性のある計画

ステップ3～4
5園（10％）
【キーワード】接続期カリキュラムの作成
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点での見直し
接続を見通した教育課程の編成
自己評価・外部評価・追跡評価
実施と改善の繰り返し
PDCAサイクルの確立

ステップ4
6園（12％）
接続を見通して編成・実施された教育課程について，実践結果を踏まえ，更によいものとなるよう検討が行われている
【キーワード】公立校にも活用しやすいような接続カリキュラムの編成
接続カリキュラム検討部会等の幼小教員の連携
小学校教員が理解を深められるような研修の機会の充実
幼小カリキュラムの接続の可視化・改善の仕組みの確立
汎用性やデータベースの蓄積
実践とその発信

（参考）幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議
「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」平成 22 年 11 月

（5）効果的な幼小接続についての考察

「Ａ幼小接続の取組の報告」「Ｂ幼小接続に関する取組の実際」においてグループ分けをした際にラベリングした項目とその関係性について下の図に示した。そこで，効果的な幼小接続を進めるに当たって大切していかなければならないことがいくつか見えてきた。その点について３点にまとめた。

①　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について

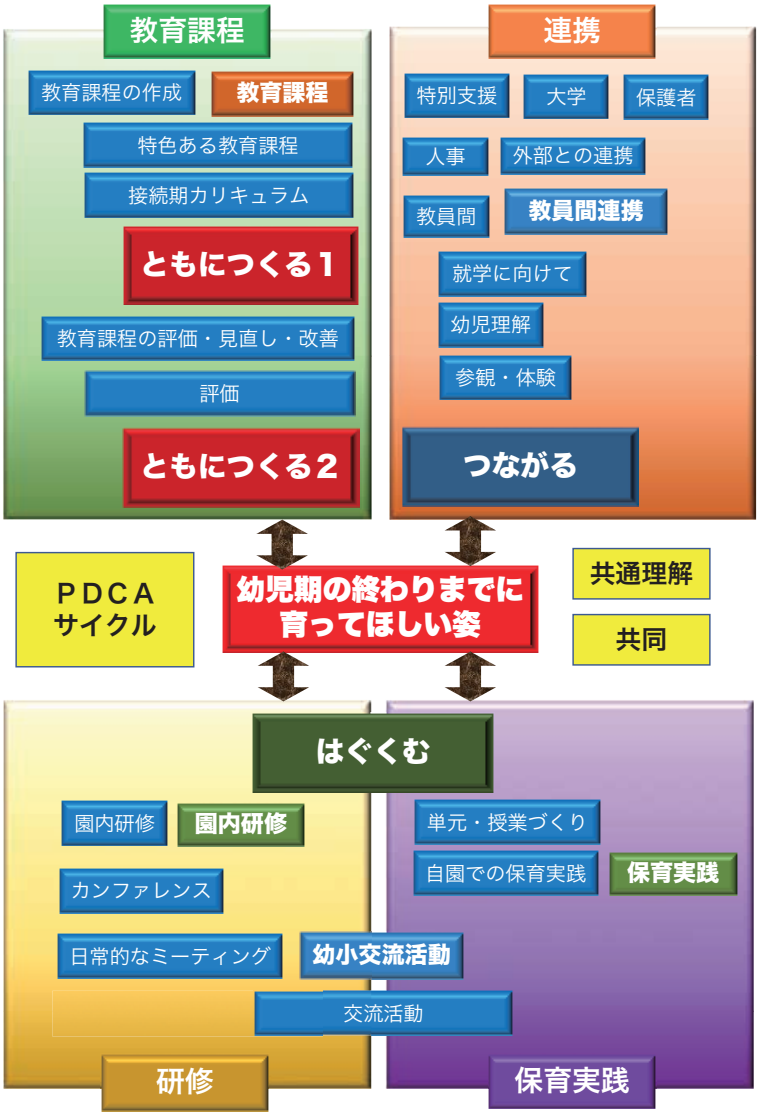
幼稚園教育要領に「幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ，小学校教育が円滑に行われるよう，小学校の教員との意見交換や合同の研究の機会などを設け，『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を共有するなど連携を図り，幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。」とあるように，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて教育課程の編成をしたり，教員間の連携を図っていったり，保育実践や研修の柱にしたりしていくことが大切である。

②　「教育課程の編成」について

幼小接続に留意した教育課程を編成する際には，まず，園内で幼児の実態を捉えながら，小学校との関わりを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて計画していくことが大切である。そして，保育実践を通して振り返り，評価・改善を図っていくと言ったＰＣＤＡサイクルの確立が重要である。また，これらの過程は，小学校教員とともに作り上げていくことが望ましい。そのためには，接続カリキュラム検討部会などで互いの普段の様子を話し合える場を作っていく必要がある。

③　「教員間連携」について

幼小接続に留意した指導方法についても教員間の連携が不可欠であるが，その際に大切にしたいことは，お互いの校種についての理解である。小学校は幼稚園のこと，幼稚園は小学校のことを理解することが幼小接続の第一歩となる。そのために，互いの保育・授業を参観したり授業の事後検討会や保育カンファレンスなどに参加して互いの教育についての理解を深めたりすることが必要である。次に大切なのは，幼小が同じ方向を見て進めていくことである。その手掛かりの一つとなるのが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」である。これらを手掛かりとして幼児の育ちを見取り，共通理解を図っていくことが重要である。最後に，幼小で単元や授業を作ることが幼小接続に有効であると考える。同じ幼児・児童理解に立った上で，お互いの学びになる場を共同で作ることが大切であり幼児・児童のより良い学びにつながる。



3　本園の幼小接続の実際

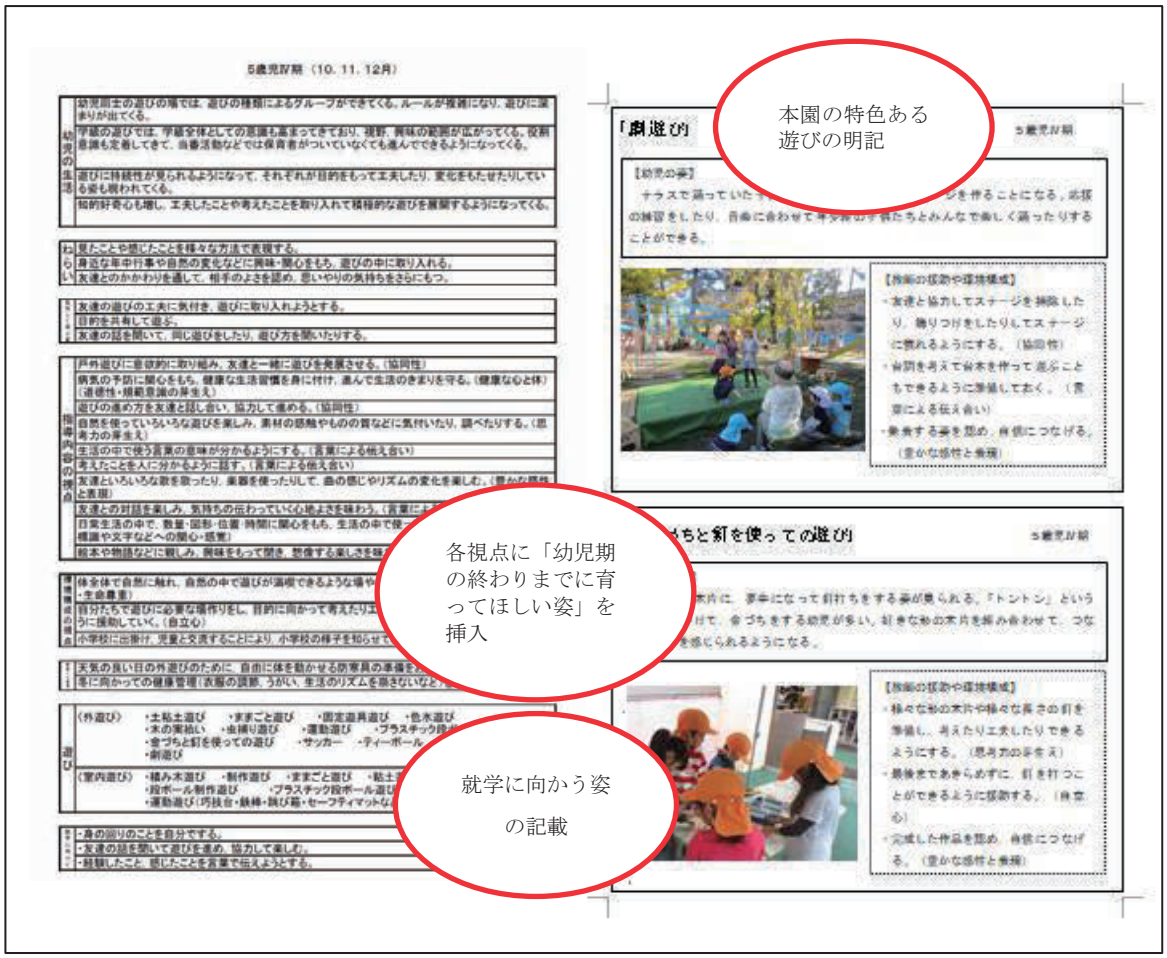
（1）幼小接続の視点から見た教育課程の見直し・改善

①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関わり

本園では教育課程検討委員会が年に３回行っている。保育実践を振り返り検討しながら，本園幼児の発達を見通した適切な教育課程の編成を行うことができるようにしている。来年度に向けて，以下の３点が改善点として挙げられた。

・指導計画の中の５歳児におけるⅣ・Ⅴ期に就学に向かう幼児の姿を記載する。
・各期の本園の特色ある遊びを選択し，その遊びについて明記する。
・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をより意識できるような形にする。

下記のように，改善していき，よりよい教育課程にしていく。



②接続期カリキュラムの作成

小学校への円滑な接続を期待するため，接続期カリキュラムを作成した。「育みたい資質・能力」が育まれている幼稚園修了時の具体的な姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置き，幼児期における学びや育ちの姿が「小学校の教員への伝わりやすくすること」を重視した。また，幼児期における遊びの中の学びが小学校での学びへとつながっていることが分かるように，小学校の年間指導計画を参考にしながら教科や単元名などを入れた。さらに，自園における代表的な遊びを８つ挙げ，小学校へのつながりが，より具体的に感じ取られるようにした。

（2）保育記録の見直し・改善

保育記録は昨年度まで毎日記録していたが，遊びの連続性を考慮して，流れなどを記載できるように今年度から週ごとに記録することにした。

本園の保育記録は遊びの様子を記録する「ドキュメンテーション」としての役割と子供の様子を記録する「ポートフォリオ」としての役割をもたせるようにしている。また，記録の際には，「教員の願い」「子供の（心の）声や思い」「子供の学び」の３点を意識して記述するようにし，印を付けて分かりやすくするようにした。この保育記録の必要な箇所を抜粋しながら，エピソード記述カンファレンスに臨むことができるようにしている。

今回の調査研究にあたり，幼小接続に向けて好きな遊びの様子から幼児にどのような育ちが見られたのかを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて捉えることが大切であると考えた。そこで，保育記録に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について記載できる欄を設けることにした。好きな遊びの中での「幼児の（心の）声や様子」「学び」などを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて捉えることで教員が意識化するとともに，環境構成を評価し，保育の質を高めていけるようにしていく。

これまでの取組の成果としては，エピソード記述カンファレンスの際に幼児の実態や育てたい姿をより明確に教員間で共有できたことである。また，共有したことを各学年の保育に確実に生かすことができたことが挙げられる。今後の課題としては，この保育記録を小学校へ接続するためにどのように活用していくかということであると考えている。考えられる活用の一つ目に，幼児の育ちと経験を小学校教員に伝えるツールとしての役割がある。これまでの指導要録などにも併せて工夫が必要であると考える。二つ目には，教育課程を改善するツールとしての役割がある。保育記録での振り返りをＰＤＣＡサイクルに組み込み，教育課程をさらに幼児の実態に合ったものに改善していけるものと考えている。

５歳児たんぽぽ組　第Ⅳ期　第　週　月　日（ ）～　月　日（ ）

月　日（ ）幼児の様子

【いっしょにいこう】Ｍさん，Ｋさん

朝から一人でいるＫさん。Ｙさんが他の遊びに行ってしまい，どうしたらよいのかという思いと嫌だなという思いがあるのか，滝の所を行ったり来たりしている。養護教諭や教頭先生に声をかけられても，一人でいた。

「どうしたの？」と言っても，返事がない。そこにＭさんがやってきた。返事がないので「『お腹が痛いのかな。』『何か嫌なことがあったのかな。』，Ｋちゃんのこと，心配なんだよ。」とＫさんに思いを伝えた。様々な遊びに誘ってみたが，すべて首を横に振るだけだった。そこで，Ｋさんが好きなお絵かきを提案した。首は降らなかったので，「テラスでかこう。行こう」と言って手を取ると，ぽろぽろと泣き始めた。横にいたＭさんが，

「せんせい，ないてる」（Ｍさん）

「だいじょうぶだよ。いっしょにいこう」（Ｍさん）

その言葉に合わせて「Ｍちゃんもいっしょだよ。」と言いながら，テラスに３人で向かった。着くと泣き止み，２人でメダカのスケッチを始めた。Ｋさんは細かいところまで見て描いていた。褒めるとにこりとして喜んでいた。「小学生の絵のようだね。３びきいるから，３びき描いてみる？」と言うと，またＫさんはにこにこと描き始めた。今までであれば，「やだ」と言ったり，力を抜いてぺたんと座り込んだりすることもあったが，そのような言動はない。ただし，「Ｋちゃん」と言われるのを待っているような様子が増えたような感じがする。母親からもかまってほしい時に，そのような態度をとることがあると言われた。

Ｋさんは，普段からお絵かきがとても上手である。描いている時は，とても穏やかな表情をしているので，描くことは好きなのではないかと思っている。この良さを生かして，遊びにもつなげていきたいと思う。

また，カンファレンスにおいて，話題になったように，就学までには，困ったことを言葉で伝えられるようにしたいものである。

この日，お弁当を食べ終わったＫさんは，メダカの水槽に近づき，メダカをずっと見ていた。

Ｍさんは，おねえさんのようにＫさんに対応していた。優しく話しかけるだけでなく，一緒に活動していて，とても安心した。

５歳児たんぽぽ組　第Ⅳ期　第　週　月　日（ ）～　月　日（ ）

月　日（ ）幼児の様子

【いっしょにいこう】Ｍさん，Ｋさん

朝から一人でいるＫさん。Ｙさんが他の遊びに行ってしまい，どうしたらよいのかという思いと嫌だなという思いがあるのか，滝の所を行ったり来たりしている。養護教諭や教頭先生に声をかけられても，一人でいた。

「どうしたの？」と言っても，返事がない。そこにＭさんがやってきた。返事がないので「『お腹が痛いのかな。』『何か嫌なことがあったのかな。』，Ｋちゃんのこと，心配なんだよ。」とＫさんに思いを伝えた。様々な遊びに誘ってみたが，すべて首を横に振るだけだった。そこで，Ｋさんが好きなお絵かきを提案した。首は降らなかったので，「テラスでかこう。行こう」と言って手を取ると，ぽろぽろと泣き始めた。横にいたＭさんが，

「せんせい，ないてる」（Ｍさん）

「だいじょうぶだよ。いっしょにいこう」（Ｍさん）

その言葉に合わせて「Ｍちゃんもいっしょだよ。」と言いながら，テラスに３人で向かった。着くと泣き止み，２人でメダカのスケッチを始めた。Ｋさんは細かいところまで見て描いていた。褒めるとにこりとして喜んでいた。「小学生の絵のようだね。３びきいるから，３びき描いてみる？」と言うと，またＫさんはにこにこと描き始めた。今までであれば，「やだ」と言ったり，力を抜いてぺたんと座り込んだりすることもあったが，そのような言動はない。ただし，「Ｋちゃん」と言われるのを待っているような様子が増えたような感じがする。母親からもかまってほしい時に，そのような態度をとることがあると言われた。

Ｋさんは，普段からお絵かきがとても上手である。描いている時は，とても穏やかな表情をしているので，描くことは好きなのではないかと思っている。この良さを生かして，遊びにもつなげていきたいと思う。また，言葉で自分の気持ちを伝えられるようにしたいものである。この日，お弁当を食べ終わったＫさんは，メダカの水槽に近づき，メダカをずっと見ていた。

Ｍさんは，おねえさんのようにＫさんに対応していた。優しく話しかけるだけでなく，一緒に活動していて，とても安心した。

幼児の終わりまでに育ってほしい姿

健康な体と心

社会生活との関わり

言葉による伝え合い

自然とのかかわり・生命尊重

自立心

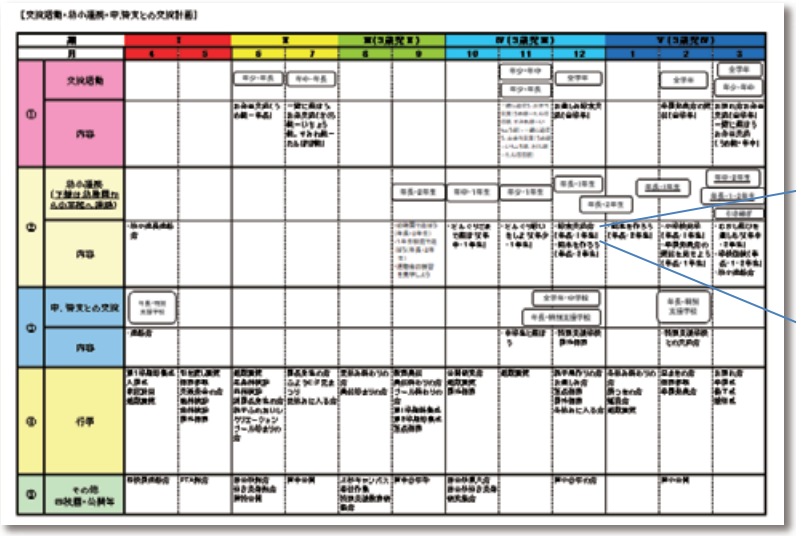
豊かな感性と表現

道徳性・規範意識の芽生え

（3）附属小学校との共有

①幼小連携交流活動

交流計画のもと，幼小連携交流を実施している。年度初めに，小学校低学年担任と３～５歳児担任による幼小連携連絡会を行い，交流活動前には，事前に担当者が打合せをしている。それぞれの小学校や幼稚園で活動を行い，回数を重ねていくことで，幼児は安心して活動することができた。



②交流活動と授業づくり

【５歳児と２年生の交流活動と共同の授業づくり】

ここでは「一緒に絵本を作ろう」という活動例を挙げる。幼小連携交流を行い，その上で幼小連携による共同の授業づくりへと移行した。

事前打合せは，幼稚園の研究協力者である宮城教育大学准教授飯島典子先生も含めて，２年生担任と５歳児担任で行った。単元の方向性やそれぞれに考慮する点などを挙げながら，授業と保育の進め方を確認することができた。小学校生活科の単元「図書かんってすてき」との関連を探っていき，幼児の姿から，文字や絵に関心をもっていることと，絵本は身近な素材であることなどから，小学生と一緒に絵本を作る方向になった。

幼児がのびのびと活動できるようにするために，男女ペアを基本にしたグループ作りや幼稚園と小学校のどちらも活動場所にすることなど，小学校教員と思いを共有しながら，進めることができた。幼児は回数を重ねるごとに，小学校教員の授業を一緒に受けることにも慣れていった。

今後も，互恵関係を大切にした活動にしていきたい。

「一緒に絵本を作ろう」交流活動と共同の授業づくり

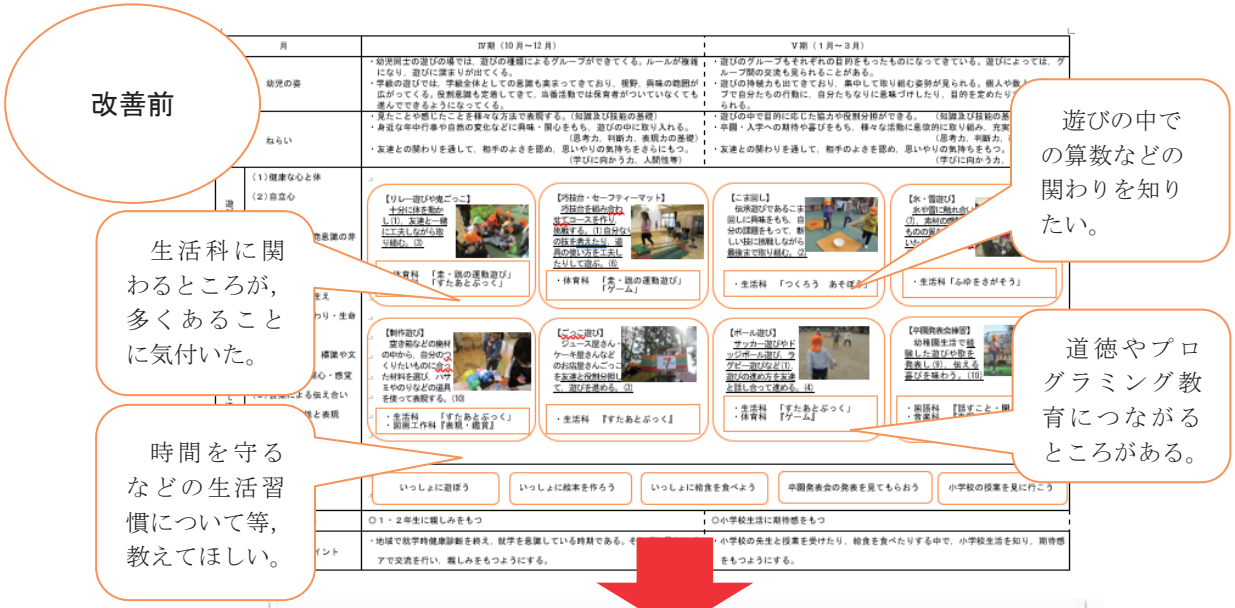
実施日時・場所	活動名	活動内容	
１２月１２日（木） 小学校多目的室３	絵本の読み聞かせを聞こう	・グループで読み聞かせを聞いたり，遊んだりして楽しむ。	交流活動
１２月１８日（水） 幼稚園西遊戯室	絵本作りをしよう	・グループで，絵本の主人公を決める。	
１月１４日（火） 小学校多目的室３	絵本作りをしよう	・グループで，絵本の内容を決めたり，絵を描いたりする。	
１月２９日（水） 小学校多目的室３	絵本作りをしよう	・グループで役割分担して，絵本を作ったり発表の練習をしたりする。	
２月７日（金） 小学校多目的室３	絵本の発表会をしよう	・グループで協力して，作った絵本を紹介する。	共同授業

③接続期カリキュラムを基にした話合い

作成した接続期カリキュラムを基に，附属小学校の教員と見直し，改善を行った。附属小学校からは主幹教諭，連携担当，附属幼稚園は研究主任（４歳児担任），教務主任（５歳児担任）が参加した。

接続期カリキュラム作成における説明を幼稚園が行い，円滑な接続に向けて，見直しや改善できるところを話し合った。約１時間の話合いの中で，幼稚園・小学校それぞれの相互理解を深めることができた。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するためには，自園における子供たちの具体的な姿や，その時の環境構成や援助も伝えていくことが必要であることが分かった。また，「算数に関わる遊びがありそうですね。」と小学校教員から話があり，「サツマイモ掘りで採ったサツマイモを数えることになったのですが，１０ずつの固まりにして数える姿があったのですよ。」と幼稚園教員が答えるなど，遊びの中で学びの土台を育む様子を共有できる場面もあった。

来年度に向けて，今回作成したカリキュラムを小学校でも活用し，朱書きを入れていただくことになった。また，３月以降のカリキュラムを幼小で作成していく方向にもなった。今後も幼児期における教育の重要性を伝えていきたい。



５歳児　たんぽぽ組　指導案

日　時　令和２年２月８日（金）９：００～９：４５
指導者　第２学年１組　柴生　彰（小学校）
保育者　たんぽぽ組 佐藤　初恵・石田　雄一（幼稚園）

１　活動名　一緒に絵本を作ろう

２　ねらい
・絵本の読み聞かせを通して，２年生や友達と一緒に活動することを楽しむ。
・２年生へ憧れの気持ちをもち，小学校入学へ期待をもつことができる。

３　本日の保育参観の視点
・幼児は，絵本の読み聞かせを通して，２年生や友達と一緒に活動することを楽しんでいたか。
・幼児は，２年生へ憧れの気持ちをもち，小学校入学へ期待をもつことができていたか。
・指導者・保育者は，絵本の読み聞かせを通して，２年生や友達と一緒に活動することを楽しめるよう援助していたか。
・指導者・保育者は，２年生へ憧れの気持ちをもち，小学校入学へ期待をもつことができるよう援助していたか。

４　保育の流れ

時間	環境構成	予想される幼児の活動	教師の援助（☆個別の援助）
9:00	○となりのグループとの距離を考えながら，発表の場の設定を行う。	**活動への見通しをもつ** ○本日の活動の内容を知る。 ○一緒に活動する２年生や幼児を確認する。	・本日の活動の流れに見通しをもって，安心して取り組めるように，活動の流れを説明する。 ・場所の移動で，戸惑うことがないように，幼児の近くにいて促すようにする。
9:05	○ペアやグループの子供たちと並んで座るようにする。 ○お互いのグループの様子を見ることができるように座らせる。	**思いをもって対象と関わる** ○協力して，楽しみながら読み聞かせを行う。 ○役割分担が分かり，自分の発表するところが分かる。	・補助が必要な場合は，助言したり，用具の準備を手伝ったりする。 ・読み聞かせの場面や感想を発表する場面で，思いを伝えようとする姿を見つけ，具体的に賞賛する。 ☆円滑に活動できない幼児に，適切な援助を行うようにする。
9:35	○手作り絵本を見やすくするために，絵本の前に集合させる。	**気付きを共有し振り返る** ○楽しかったことを振り返って，話をする。 ○感想を聞いて，２年生や他児の考えを知る。 ○２年生へ感謝の気持ちをもつ。	・幼稚園児は幼稚園教員が指名し，発表できるようにする。思いに共感し，褒めることで，活動に満足感が得られるようにする。 ・次の活動に期待をもてるように，２年生と幼稚園児が話す場面を設ける。 ・２年生のよさを感じることができるような振り返りをする。

(4)　本園の幼小接続の取組

宮城教育大学附属幼稚園

1　幼小接続に関する園の特徴

(1) 園の立地について

本園は，宮城教育大学附属学校園上杉キャンパス敷地内に附属小学校，附属中学校の２校と併設されている。例年５歳年長児の９８％以上が附属小学校への連絡進学をしており，さらに附属小学校の校庭は園舎のすぐ隣にあることから，幼児・児童及び教員同士の交流がしやすい立地条件となっている。附属特別支援学校だけは青葉山キャンパスにあり離れているが，附属校園の連携研究テーマが「『かかわり合う力』をはぐくむ」となっていることから，それぞれの学校間で「即計画・即実行」で「気軽」に行き来する「関わる活動」を行うことが伝統的にできている。

【共同で単元開発した交流授業】

(2) 園の幼小接続の特色

本園の教育目標「お日さまいっぱいふりそそぐ中で『元気な子ども』『やさしい子ども』『考える子ども』を育てる」と附属小学校の教育目標「体も心もたくましく，しかも，しなやかな子供」，そして四校園連携研究テーマ「『かかわり合う力』をはぐくむ」を受けて，附属小学校のみならず各３校と連携・交流を行っている。本園の小学校との連携に関しての特色として，次の３つがあげられる。１つ目は，年少・年中・年長の全ての学年が小学校１，２年生と交流していること，２つ目は，附属特別支援学校のセンター的機能を活用した上杉学習支援室を設置し，子供たちの特別な教育的ニーズに応えた幼稚園からの長期的な支援をしているということ，３つ目は，附属小学校教員と生活科部会で話合い，共同して単元開発に取り組み，附属小学校公開研究会では５歳年長児と１年生で授業を公開したということである。

(3) これまでの幼小接続の取組（経緯）

上記（1）で述べたように，附属校園の連携研究テーマが「『かかわり合う力』をはぐくむ」となっている。これは，平成１６年度から取り組んでいるテーマであり，幼稚園と小学校でもこの頃から活発に交流活動が行われるようになった。始めは，５歳年長児と１年生が好きな遊びと小学校生活科の授業で交流していたが，昨年度幼稚園教育要領の全面実施を機会に令和２年度の小学校学習指導要領全面実施に向けて，取組内容を小学校低学年教員と幼稚園教員で話合い，改訂した。年少・年中・年長の全ての学年が小学校１，２年生と交流できるよう計画，実行することと，年長組と１年生が授業交流するときには，生活科の単元を共同で開発することとした。今年度は，年長組と２年生の生活科授業について共同で単元開発を行うことになっている。

2　小学校教育との接続に関わる取組と内容

(1)　小学校教育への接続に留意した教育課程を工夫するために

①　幼児と児童の交流活動計画の作成と実施，改訂

幼稚園の教育課程と附属小学校の生活科年間活動計画をそれぞれ作成する際に，幼小の交流活動について「時期」「内容」等を確認する話し合いをもっている。できあがった計画を基に，交流活動を実施しているが，実施するときにも担当教員で行き来し，打合せを行っている。４月には，幼稚園教員と１，２年生担任が前年度計画の課題を踏まえて，それぞれの計画を見直しする。

②　保育記録シートの作成と引継ぎ

１週間の遊びの流れや教師の援助や環境構成による遊びの変化，幼児の発達の様子を週の教育課程と共に，記録し累積している。記録に示している「教師の願い」と「子供の学び」は，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて記載している。保育記録シートを，小学校就学の折に，小学校教員が幼児の育ちと幼稚園での経験を伝えるツールとして活用することを考えている。

③　上杉学習支援室と附属校園コーディネーター連絡会

本附属校園上杉キャンパスには，附属特別支援学校教員が配置されている上杉学習支援室（「さぽーとルーム」「あしすとルーム」）がある。附属幼稚園入園から附属小学校を経て，附属中学校卒業まで特別な教育的ニーズに応えるため「一貫した」「継続した」「長期的支援」を実施している。支援室室長と附属校園コーディネーター連絡会が中心となって「通級指導」「専門家チームによる巡回指導相談」「保護者向け特別支援セミナーの開催」等早期支援の充実を図り，附属小学校で継続支援が行えるようにしている。

(2)　小学校教育への接続に留意した指導方法を工夫するために

①　小学校就学に向けて下記のことを行っている。

・　「幼稚園教育において育みたい資質・能力」やそこに含まれる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を遊びを通してどのように育てているのかがよく分かる保育実践と記録を行う。

・　５歳児では小学校生活への接続期を意識して，振り返り活動の司会，聞き手を意識した今日の遊びの発表，遊びを構成するための話合い活動等集団での活動を意図的に取り入れている。

②　保育記録を基にしたドキュメンテーション

保育記録を基にしてドキュメンテーションを作成し，教師，幼児，保護者が確認できるように掲示している。保護者の保育や園経営への理解，幼児の自己肯定感の醸成や学びの共有を促すと共に，教師間の幼児の学びの理解や教育内容の質の向上を図ることをねらいとしている。

③　５つのカンファレンスと保育記録　※取組の実際

日々の保育をより質の高いものとし，幼稚園生活全体を通して幼児のよりよい発達を目指すために，「環境構成カンファレンス」「園行事カンファレンス（PEMQ の手法で）」「保育環境から見た遊びを捉えるカンファレンス」「TEM カンファレンス」「エピソード記録カンファレンス」を行っている。カンファレンスの記録は，印刷室等常に見える場所に掲示し，職員全員で確認できるようにしている。カンファレンスには保育記録も活用する。

④　特別支援委員会

上杉学習支援室長をコーディネーターとして園内では１～２ヶ月に１回実施している。特別な配慮を要する幼児について，どのような保育を展開したら良いのか，特に５歳児の就学に向けた保育の在り方を話し合っている。室長には，小学校へスムーズに適応できるように，幼児の発達や幼稚園での保育の様子について情報を共有するための仲立ちをしてもらっている。

(3)　小学校との共有を図るために

①　単元共同開発

幼稚園教員と附属小学校生活科部会の教員で，共同して生活科の単元開発と授業づくりを行い，附属小学校公開研究会で交流授業を公開している。授業でねらうことや幼児の発達と遊びの中で育ててきたことなど十分に話合うようにしている。

②　教育課程の見直し

幼稚園の全学年幼児と附属小学校１，２年生児童でそれぞれ行っている交流活動について，幼稚園教員と小学校低学年担任で４月に集まり，前年度の反省を踏まえて新年度の計画を立てている。

③　上杉学習支援室の取組

進学する特別な配慮を要する幼児の引継や幼児と保護者の小学校参観，入学後の情報共有等，上杉学習支援室のコーディネートで行っている。

【連携から接続へのプロセス】

(1)　自園は現在どのプロセスにあるか

ステップ２とステップ３の途中あたり

(2)　自園のプロセスについて　　～経緯と今後の計画～

本附属校園では，連携研究テーマ「『かかわりあう力』をはぐくむ」のもと，幼稚園と小学校の子供や教員の授業や行事，研修会での交流等は多く実施されてきた。連携研究については，「１　子供の発達段階に応じた緩やかな接続を図ることで，各校種間の接続期における子供の負担を減らすこと」「２　教員同士の情報交換を密にすることで，心の教育や子供の理解の在り方，基礎基本を徹底する学習指導について関連を持たせること」「３　附属校園内の子供同士の交流活動の場を大切にすることで，健全な人間関係を築くこと」「４　幼小中と特別支援学校が連携を図ることにより，特別な支援を必要とする子供の実態を把握し，適切な支援の在り方を探っていくこと」をねらいとしている。しかし，接続を見通して教育課程を編成・実施・改善をすること，いわゆる「スタートカリキュラム」作成については，まだ十分に行われていない。来年度からの小学校学習指導要領の全面実施に向けて，小学校の今後の予定と調整しながら，よりよい教育課程の編成とＰＤＣＡサイクルのシステムを構築していくことを両校で検討している。

Ⅲ　研究の成果と課題

1　研究の成果

○　「幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続」を図るためのポイントの整理

各附属幼稚園における小学校教育との接続に関わる取組の事例について，「小学校教育への接続に留意した教育課程の工夫」，「小学校教育への接続に留意した指導方法の工夫」，「小学校との共有」という３つの視点から具体的な実践や留意点について記載を求めた。それらの事例を分析し，連携・接続の視点から共通していることをカテゴリーとしてまとめたところ，教育課程，連携，研修，保育実践等が挙がってきた。このことから，幼小連携・接続を進める上で，教育課程，連携，研修，保育実践等は多くの附属幼稚園で重視していると言える。それぞれの項目でどのようなことを重視したり，留意したりしているかについて，以下のとおりまとめた。

〔 教育課程について 〕

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに小学校教員と共に教育課程を作成することにより，幼稚園教育が小学校教育へつながる基盤となることを再確認できた。特に，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を幼稚園と小学校の教員が話し合うことで，幼児の姿を共有することができ，各学校段階での学びや目指す子供像の共有化につながっている。また，教育課程の評価・改善では，幼児の実態を踏まえる必要がある。そのため，保育記録やドキュメンテーションを活用することの効果が報告されている。このことによって，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして「資質・能力」がどのように育まれているかを捉えることができ，幼児の実態を踏まえた教育課程の改善に生かされている。さらに，保育記録やドキュメンテーションは，小学校教員に向けて子供の育ちやそこに至るまでの過程を伝えること，その意義や成長について理解を図ることができることも分かった。

幼稚園の教育活動において教育課程が重要であることは，今更，言うまでもないことであるが，教育課程に基づき組織的かつ計画的に各幼稚園の教育活動の質の向上を図っていく「カリキュラム・マネジメント」の重要性を再確認できた。

〔 連携について 〕

幼小の連携・接続を進める上では，幼児と児童の交流，幼稚園と小学校の教員間の交流だけではなく，家庭や大学等との連携も重要であることがわかった。特に教員間連携では互いの校種の特性や相違点，類似点について理解することを大切にし，「資質・能力」，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりの一つとして幼児の育ちを見取り，共有化することが重要である。幼児の学びにつながる遊び，児童の学びにつながる単元や授業を相互理解の上で共に作り上げることが，幼稚園教育と小学校教育を円滑に進めるうえで有効であると考えらえる。

〔 研修について 〕

保育記録やドキュメンテーションなどの資料を活用してカンファレンスなどの話合いを実施することで，幼児・児童の理解が深まり発達や学びの連続性について，幼稚園と小学校の教員の学び合いを深めることができている。また，研修を実施することで，根拠のあるカリキュラム・マネジメントを行うことができると共に，教員自身の指導力の向上にもつながっている。

〔 保育・授業実践について 〕

小学校の教員との共有を図るために，単元・授業づくりや幼小交流活動が多く挙げられ，幼稚園と小学校の教員が合同で，協同性や社会性を育むことや，就学に向けた幼児の期待感や安心感を高めることができるような活動を計画し，実践している取組が多く見られた。また，交流活動では共通の学びを意識して保育・授業を作り上げることで，幼稚園，小学校の互いの幼児・児童理解や保育・指導の理解にもつなげている。

○　特色ある取組について

各園の特色ある取組について，幼小接続の段階や取組内容によって次のように分類することができた。分類・整理することで，幼稚園等で幼小接続に関する取組を実施する際，各園の実態や現在の幼小接続への取組状況によって参考となることが期待される。

「 はぐくむ 」

幼小接続への第一歩として，取りかかりの手掛かりとなる事例

小学校との接続を意識した園内研修や「資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた保育実践

幼小接続へ取り組むための取りかかりのポイントや基本的なこと，普段の教育活動を生かして実践できることが示されている

「 つながる 」

幼小接続の取組について，少しステップアップしたい場合の手掛かりとなる事例

小学校教員に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた幼児の姿の捉えを紹介する取組や保育・授業参観などによる教員間連携と，お互いが協力して計画・実施する幼小交流活動

幼小の円滑な接続の基本である，教員間連携や交流活動の充実を図る実践が示されている

「 ともにつくる１ 」

幼小接続の取組を深めていきたいときの手掛かりとなる事例

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や保育・授業参観等を手掛かりに幼稚園と小学校の教員が協力して接続期の教育課程を作成

さらに進んだ幼小の円滑な接続を図るための，教育課程の編成，それも校種間で組織的に幼小部会を運営するなど，教員が協力し合って行った取組が示されている

「 ともにつくる２ 」

幼小接続の取組が深まり，恒久的に評価・改善を行う手掛かりとなる事例

幼小の連携を基盤に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとしながら，幼児や児童の実態等を踏まえて教育課程を見直し・改善

真に幼小接続を円滑に行うための，作成した教育課程を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえつつ，発達を長期的な視点から見通して常に評価・改善を行っている実践が示されている

○　幼小接続の取組について

全国国立大学附属幼稚園への調査により，全体の約７割がステップ２「年数回の授業，行事，研究会などの交流があるが，接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない」または，ステ

ップ２～３「授業，行事，研究会などの交流が充実し，接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている」にあることが明らかになった。また，約２割ではあるがステップ３を超える取組においては，教員同士の交流が充実していること，子供の姿が幼小の教員で共有されていることが前提となり，接続期のカリキュラム作成が行われ，その実践において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえたＰＤＣＡサイクルが確立されていた。

○　小学校教育への接続を見通した教育課程の編成について

小学校教育への接続に留意した教育課程を編成する際には，園内での幼児の実態を捉えながら，小学校との関わりを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして計画することが大切である。また，保育実践を通して振り返り，評価・改善を図るＰＤＣＡサイクルの確立が重要である。これらの過程を小学校教員とともに作り上げていくことが望ましく，そのためには，互いの普段の様子を話し合えるような場を設定する必要がある。

２　今後の課題と展望

視点１「小学校教育への接続に留意した教育課程を工夫するために」

○　幼小接続の教育課程の編成・実施とその評価

今回の調査研究で，各園が小学校と連携した取組を推進することにより，幼小の円滑な接続に資する教育課程の工夫を図っている状況が，多くの事例から見えてきた。しかし，幼小接続の教育課程を編成し，恒常的に評価・改善している幼稚園が多いとまでは言えない。

今後は，事例で挙げられているような取組を基盤としながら，幼小接続の教育課程の編成・実施，さらには幼児や児童の実態を踏まえたものとなっているか，組織的・計画的に行われているかなどを評価し，改善に生かしていくことが求められている。

視点２「小学校教育への接続に留意した指導方法を工夫するために」

○　幼小の継続的な取組

幼小接続に留意した指導方法の工夫に当たり，それぞれの教員による子供の発達段階の確認，教育内容や付けたい力，関わり方や指導方法などについての理解を深める取組の状況が見えてきた。

今後は，こうした取組の結果，幼小相互で実態を踏まえ，接続に留意して指導方法を工夫した具体例の蓄積と分析を行うことで幼児理解と教育力の向上に資するようにしていきたい。

視点３「小学校との共有を図るために」

○　幼稚園での育ちを踏まえた小学校での教育実践

今回，教員相互の情報共有の重要性が改めて明らかになり，保育・授業参観の実施などを通して，発達や指導方法に関する協議等を通じた情報共有などの取組を推進している状況が見えてきた。

今後は，幼稚園での保育や育ちの姿を小学校の教員に分かりやすく伝え，幼稚園教育を通した学びを小学校の学習で活用できるような工夫など効果的な実践事例について分析することで，校種間の相互理解の促進につなげたい。

Ⅳ　資料

※　付属ＣＤ−ＲＯＭ収録

1　幼小接続の取組の報告
全国国立大学附属幼稚園49園の事例
本書2(３)「協力園の幼小接続の取組状況報告」で6園抜粋

2　幼小接続トピック資料
全国国立大学附属幼稚園49園の幼小接続に関する取組で，該当園のトピックとなり，自園の現状に合わせて活用できる事例

3「幼稚園教育と小学校教育の違い」調査結果
全国国立大学附属幼稚園49園の幼小接続に関する意識・実態調査

4　勉強会記録
(1)「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続について」※令和元年度幼稚園教育課程宮城県研究協議会講演に於いて
文部科学省初等中等教育
視学官　湯川　秀樹　氏
（併任　初等中等教育局幼児教育課　教科調査官）
(2)「幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続とは
～幼児の発達をどう理解するのか～」
宮城教育大学教員キャリア研究機構幼児教育（保幼小連携）研究部門
教授　　佐藤　哲也　氏
准教授　飯島　典子　氏
(3)「幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続とは」
兵庫教育大学大学院　学校教育研究科　専門職学位課程
小学校教員養成特別コース　准教授
国立教育政策研究所　幼児教育センター　フェロー
鈴木　正敏　氏
(4)「遊びの中でつむぐ言葉と心　～子どもの未来につながる力を育てる～」
兵庫教育大学大学院　学校教育研究科　専門職学位課程
小学校教員養成特別コース　准教授
国立教育政策研究所　幼児教育センター　フェロー
鈴木　正敏　氏
(5)「幼小の円滑な接続とこれからの幼稚園教育」
上智大学　総合人間科学部　教育学科
教授　奈須　正裕　氏

5　訪問調査記録
(1)　お茶の水女子大学附属幼稚園
(2)　神戸大学附属幼稚園
(3)　金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園
(4)　上越教育大学附属幼稚園

Ⅳ　資料内容について

2　幼小接続トピック資料について
全国国立大学附属幼稚園49園の幼小接続に関する取組で，該当園のトピックとなり，自園の現状に合わせて活用できる事例

※　「教育課程」，「連携，交流活動」，「研修会」，「保育実践」など，幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を目指して取り組んでいる各園の具体的な実践が寄せられている。中には，附属学校として取り組んだ研究の取組や成果も挙げられている。

（例）

【自園の幼小接続トピック資料】　　新潟大学教育学部附属幼稚園

1　幼小接続カリキュラム全体計画

３「幼稚園教育と小学校教育の違い」調査結果について
全国国立大学附属幼稚園49園の幼小接続に関する意識・実態調査

※　調査結果概要

調査項目	調査結果概要（抜粋）
小学校就学に向けて年長５歳児への聞き取り	期待：勉強への期待感が大きく，次いで遊び，給食への期待が大きい。 不安：勉強，次いで登下校，早起き。 全体的に小学校就学への期待感をもつ幼児が多い。小学校の学習については，期待感と不安感が表裏一体となっている感がある。幼稚園生活との違いやその指導の違いを感じ，そこに不安を感じている。
小学校就学に向けて幼稚園教員への調査	期待：学校が楽しい，幼稚園の経験や学びを生かす，興味・意欲・関心をもたせる，個に応じた適切な対応，主体性を重視の順に多い。 不安：幼稚園生活とのギャップ，幼児（児童）理解，小学校生活への適応，特別支援に関わる配慮の順に多い。 全体的に幼児よりも教員が不安を感じている。幼児（児童）理解と個の尊重，幼稚園教育への理解と尊重について不安を感じている。
小学校就学に向けて小学校教員への調査	期待：小学校を楽しみにしている，豊かな経験をしている，スムーズにスタートが切れる（交流，連携の成果），発想力と構想力，創造性と協調性が身に付いている。 不安：人間関係（保護者，幼児），小学校生活への適応，身辺自立，前倒し教育の弊害，学力。 幼稚園での経験を小学校で生かしたいが，現実的に難しいと感じている。人間関係のトラブルや学力の差など，小学校現場での課題の原因の一つに幼稚園での生活があると感じている教員も多い。
小学校教育への接続について幼稚園教員への調査	「交流や連携がうまく行われている」から困り感はないと回答している教員もいるが，「交流や連携を図る時間がとれない」「幼稚園教育を理解してもらうことが困難」などの困り感を感じている教員が多い。
小学校教員経験者の意識	「『導く』よりも『同行』のような意識が生まれた」「『待つ』こと，『見取ること』ができるようになった」「幼稚園児はこんなにも『やれる・できる』ことを知った」など小学校教員時代からの意識の変容を実感している教員が多い。「子供理解に努め主体的に学ぶ子供を育てるという点では教育の基本は同じ。お互いにもっと理解し合えれば」という意見もある。
幼稚園教員のみ経験者の意識	幼小の円滑な接続はとても難しい，小学校優位な風潮は否めないなど，お互いを理解する困難さを感じている教員が多い。だからこそ幼稚園側から積極的にアプローチし，子供にとってより良い関係を作りたいと考えている教員も多い。
副園長（園長）の思い	管理職として，幼小接続を円滑にするためにどのように小学校と連携をしていくか，働き方改革による時間の創出なども踏まえつつ，日々悩みながらも，様々に取り組んでいる様子が伺えた。 幼稚園と小学校相互の教育に関心と敬意をもって，子供同士，教員同士の関わりを増やしていきたいと考えている方が多い。また，管理職同士のコミュニケーションの重要性を挙げている方も多い。

※　調査様式については次頁参照
　　集計・考察の詳細は付属ＣＤ−ＲＯＭ収録

「幼稚園教育と小学校教育の違い」調査について（お願い）

別紙「幼稚園教育と小学校教育の違い調査」について下記の点にご留意ください。

1　「小学校就学に向けて」

①　設問１について

自園の５歳児（抽出児１０名：抽出は各園任意で）に聞き取りをして，記入してください。（特に１−②については）**保育をしながら子供のつぶやきを拾って**もかまいません。

※　勉強会において，鈴木准教授（兵庫教育大），佐藤教授（宮城教育大）からは，「一緒にお絵描きしながらさりげない会話の中で言葉を拾うのが良い」と助言されています。（勉強会記録参照）

②　設問２について

自園で担任をなさっている先生と養護教諭に調査し，集計してください。

③　設問３について

附属小学校該当教員に調査して集計してください。

④　考察について

集計結果の考察を簡潔に記入してください。

2　「小学校教育への接続について」

①　設問１について

自園で担任をなさっている先生と養護教諭に調査して，集計してください。

②　設問２について

自園で担任をなさっている先生と養護教諭の中で小学校教員経験者へ調査し，集計してください。

③　設問３について

自園で担任をなさっている先生と養護教諭の中で幼稚園教員の経験のみの方に調査し，集計してください。

④　考察について

集計結果の考察を簡潔に記入してください。

3　「小学校教育への接続について副園長（園長）として考えていること」

・ここは，副園長（園長）先生にご記入願います。
管理職として幼小接続について考えていることや感じていることをお書きください。

※　<u>集計用紙</u>での提出をお願いいたします。

お忙しいところ，大変申し訳ございません。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

幼稚園教育と小学校教育の違い

小学校就学に向けて

１　５歳児について（聞き取り）

①　小学校入学で楽しみにしていること

勉強	人
遊び	人
行事（運動会　学習発表会　校外学習）	人
給食	人
広い校庭	人
休み時間	人
その他（　　）	

②　小学校入学で心配だなと思っていること

勉強	人
遊び	人
友だち	人
行事（運動会　学習発表会　校外学習）	人
給食	人
広い校庭	人
休み時間	人
登下校	人
トイレ	人
先生	人
早起き	人
その他（　　）	

２　幼稚園教員について

①　小学校就学に向けて期待していること　人

学校が楽しい	人
個に応じた適切な対応	人
自信をもたせる	人
学習・学力	人
幼稚園の経験や学びを生かす	人
根気強さ	人
主体性	人

交友関係　　人
興味・意欲・関心をもたせる　　人
チャレンジ精神　　人
その他（　　）

② 小学校就学に向けて不安に思っていること
幼児理解　　人
無理な課題　　人
幼稚園生活とのギャップ　　人
交友関係　　人
学習規律（話を聞く　整列する　挙手による発言　座学ができる　等）　　人
基本的生活習慣　　人
自己実現・自己表現　　人
登下校　　人
座学への適応　　人
小学校生活への適応　　人
特別支援に関わる配慮　　人
トイレの使い方　　人
給食　　人
その他（　　）

３　小学校教員について（附属小学校１・２年生担任と管理職相当者１名へ　記述）

① 幼稚園児入学について期待していること

② 幼稚園児入学について不安に思っていること

【考察】

小学校教育への接続について
1　小学校への接続について困っていることがあるか ①　ある 　理由 ②　ない 　理由
2　小学校教員経験者の意識について ①　小学校教員時代と幼稚園教員になってからの意識の変容（記述）
3　幼稚園教員のみの経験者について ①　幼稚園教育と小学校教育の接続について感じていること（記述）
【考察】

小学校教育への接続について副園長（園長）として考えていること
副園長（園長）先生の思い（記述）

（〇〇大学附属幼稚園）

〈調査実行委員会〉

宮城教育大学附属幼稚園

園　　長	木下　　英俊
副 園 長	菅原　　理恵
教　　諭（学内教頭）	石田　　雄一
教　　諭（教務主任）	佐藤　　初恵
教　　諭（研究主任）	小森谷　一朗
教　　諭	宍戸　佳央理
教　　諭	片平　みちる
養護教諭	舘岡　　悠里

宮城教育大学附属小学校

教　　諭（主幹教諭）	佐藤　　俊宏
教　　諭	柴生　　彰
教　　諭	新田　　佳忠

宮城教育大学附属学校課

課　　長	笹村　　和雄

〈ワーキング委員会〉

山形大学附属幼稚園

園　　長	村上　ゆかり

北海道教育大学附属函館幼稚園

副 園 長	藤谷　　毅

北海道教育大学附属旭川幼稚園

副 園 長	北島　　裕二

弘前大学教育学部附属幼稚園

副 園 長	小笠原　朋子

秋田大学教育文化学部附属幼稚園

副 園 長	小玉　　雅彦

岩手大学教育学部附属幼稚園

副 園 長	千葉　　紅子

福島大学附属幼稚園

副 園 長	星　　俊子

〈研究協力事例提供絵園〉全国４９国立大学附属幼稚園

〈研究協力団体〉全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

〈研究協力者〉

宮城教育大学 教員キャリア研究機構幼児教育（保幼小連携）研究部門

教　　授	佐藤　　哲也
准 教 授	飯島　　典子
准 教 授	越中　　康治
准 教 授	香曽我部　琢

〈勉強会講師〉

文部科学省初等中等教育局

視 学 官	湯川　秀樹

（併任　初等中等教育局幼児教育課　教科調査官）

宮城教育大学 教員キャリア研究機構幼児教育（保幼小連携）研究部門

教　　授	佐藤　　哲也
准 教 授	飯島　　典子

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 専門職学位課程 小学校教員養成特別コース

准 教 授	鈴木　　正敏

上智大学　人間科学部教育学科

教　　授	奈須　　正裕

國學院大學　人間開発学部　子ども支援学科

教　　授	神長　美津子

〈参考文献〉

○文部科学省（平成３０年）「幼稚園教育要領解説」フレーベル館

○文部科学省（平成３１年・令和元年）「初等教育資料」（４月号～１月号）

○国立大学法人　鹿児島大学（平成３１年）
「『社会に開かれた教育課程』を編成するカリキュラム・マネジメントに関する研究」
○国立大学法人　鳥取大学（平成３０年）
「幼稚園における指導の評価の在り方に関する研究」
○国立大学法人　神戸大学（平成２９年）
「幼児期に育みたい資質・能力を支える指導方法と評価に関する研究
―幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の観点から―」
同　研究紀要３８（令和元年）
「『幼小接続』から『幼小一体』へ
―９年間を一体としてとらえた『初等教育要領』の充実をめざして―」
○国立大学法人　お茶の水女子大学（平成２８年）
「幼児期の非認知能力の発達をとらえる研究　―感性・表現の観点から―」
同　（平成２０年）　東洋館出版社
「『接続期』をつくる　幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働」
同　研究開発実施報告書（平成３１年）
「幼児の発達と学びの連続性を踏まえた幼稚園の教育課程（３歳児～５歳児）の編成
及び保育の実際とその評価の在り方についての研究開発」
○国立大学法人　鳴門教育大学（平成２８年）
「幼児の科学的思考を支える非認知能力の発達的様相
－好奇心・やり抜く力・協同的感性の視点から」
○国立大学法人　千葉大学（平成２７年）
「多様性と関連性のある体験を通して幼児期の学びを深める実践研究」

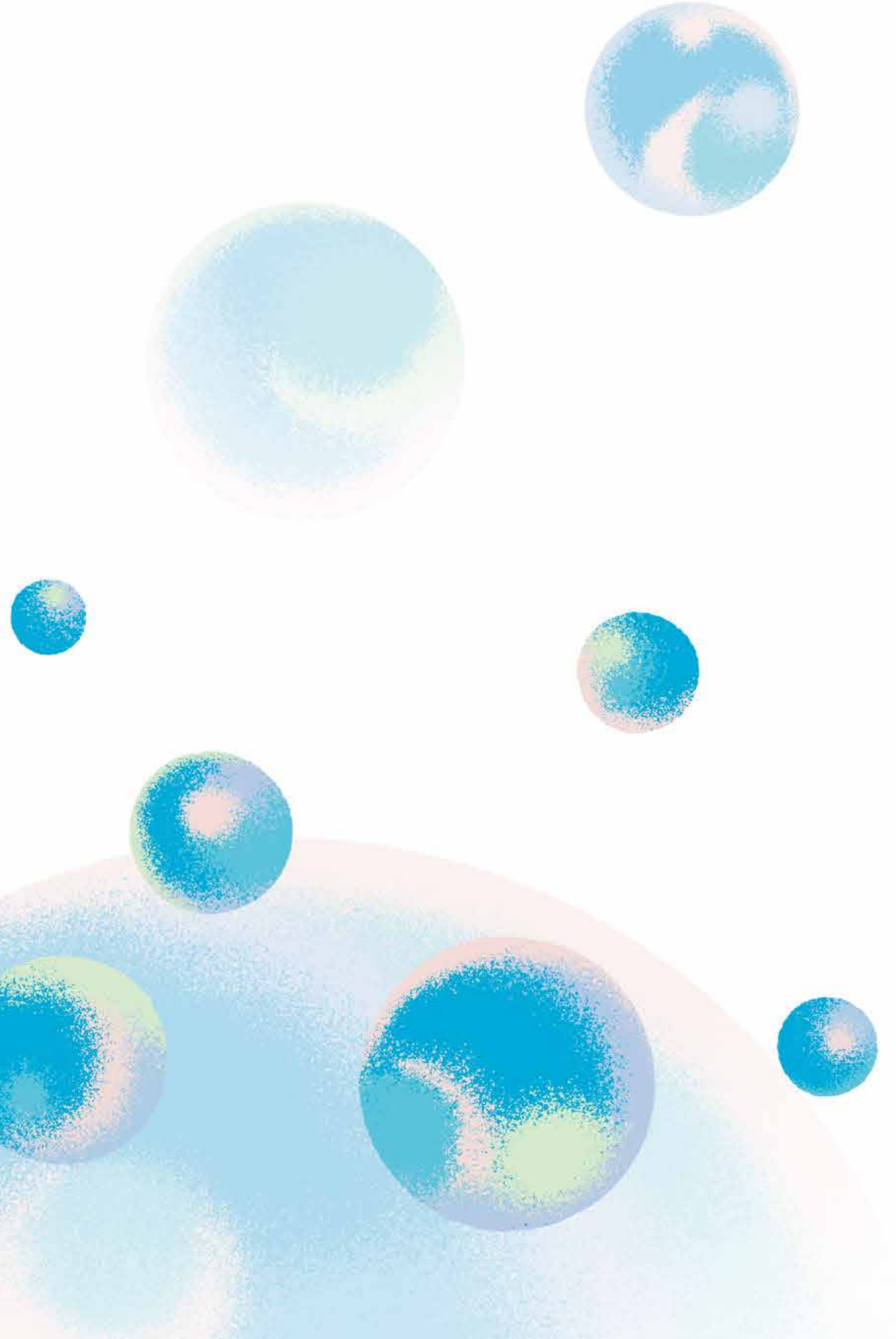
○国立大学法人　上越教育大学　研究開発実施報告書（平成２５年）
「幼稚園教育と小学校教育の接続期におけるリテラシーの基盤形成に向けた学習者の
学び合い，支え合う共同体の育成を目指すカリキュラムと指導方法等の研究開発」
同　研究紀要（平成２３年・２４年）
「幼小接続を考える１・２」
同　教育課程と年間指導計画（平成３１年）
「子どもの育ちを支える　～教育課程と年間指導計画～」
○国立大学法人　金沢大学（平成３１年）
「接続期プログラム　前・後期」

○文部科学省・国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成平成３０年）　学事出版
「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　―スタートカリキュラム導入・実践の手引き―」

○無藤　隆（平成３０年）　東洋館出版社
「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」

○神長美津子（平成２１年）　フレーベル館
「はじめよう幼稚園保育所『小学校との連携』　―実践事例集―」

○奈須正裕（平成２９年）　東洋館出版社
「『資質・能力』と学びのメカニズム」

○宮城教育大学附属幼稚園（平成３１年）
「子どもが夢中になって遊ぶ環境とその援助　～心の育ちと言葉の育ち～」

○宮城教育大学附属幼稚園（平成３０年）
「子どもが夢中のなって遊ぶ環境とその援助　～体を動かして遊ぶ～」